あとがき

全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームメンバー／
文学部教授　河野 哲也

全学共通カリキュラムは、教養を担う科目です。教養とは、今日どのような意味を持つでしょうか。最近、日常生活では「教養」という言葉をすっかり耳にしなくなりました。かつては「教養のある人」とか、「教養が豊か」という言い方がありましたが、いまでは、教養の豊かな人というのがどういう人なのか、はっきりとイメージができなくなっています。

教養とは、ただ色々な分野を広く浅く知っているということではありません。現代の大学で使われる「教養」という概念は、はるか古代ギリシャの「パイデイア」にまで遡ることができます。パイデイアとは、「子ども」から派生した言葉で、紀元前五〜六世紀には、「教育、養育、しつけ」一般を意味していました。ですが、紀元前四世紀半ごろには、職人的な専門技術でもなく、また子どものしつけのようなものでもない、「人間を人間たらしめる教育」を指すようになりました。「人間を人間たらしめる教育」とは何でしょうか。それは、多様な人と交流しながら、一つのポリス（社会・国家）を形成していく教育のことです。パイデイアは、それぞれの専門を結び合わせることのできる知恵を学ぶことです。

現代社会において求められる教養とは、さまざまな人を結びつけ、多様な人びとのあり方と役割を社会の変数として理解し、そのどの立場も共感的に理解しようとする認識と態度の獲得にほかなりません。 それは、細分化・専門化された現代の世界を調和的に捉えるためのものでもあります。教養教育とは、単に専門課程へといたるための準備や前段階ではありません。むしろそれは、専門知識を、専門集団の関心と利害の文脈から一般社会の関心と利害の文脈へと置き直し、専門知識の意味と価値を改めて理解し直し、問い直す作業なのです。本学で、全学共通カリキュラムが、全学年に渡って学ぶべきものとされているのはそのためです。専門知識と教養との関係は、専門家集団と市民社会のように循環的でなければならないのです。教養は専門のために、専門は教養のためにあるのです。

したがって、教養とは豊かな人間交流を可能にするものです。教養のある人とは、人間や社会や自然のどれにも好奇心を持ったさまざまな人と社交できる人物のことだと言えるでしょう。今回特集された「英語ディスカッションクラス」、あるいは、言語としての手話は、そのための重要な礎なのです。

こうの　てつや